

シャーロット・ブロンテの『教授』における語り

—自己抑制と感受性の間で—

皆 本 智 美

要 旨

シャーロット・ブロンテの『教授』は男性の語り手による一人称小説であるが、当時の女性作家によるイギリス小説で、小説中一貫して男性の語り手を採用しているものは希少である。しかし現在に至るまで、この小説の評価は概して高くない。

『教授』の語り手であり主人公であるウィリアム・クリムズワースは、しばしば読者に対して教諭するように語りかける。このような語りの特徴の理由としては、彼が教師であることに加え、さらに彼が自己抑制を身に付け、ヴィクトリア朝における男性性を体現する権威を持った人物であるということが考えられる。

しかしながらクリムズワースは自己抑制を指針として行動する一方で、感受性を重要視している。すなわち彼は自己の内面と外界との間に浸透性のない堅固な境界を打ち立てる一方で、外界から内面への影響をも重視する。

このように彼は矛盾した価値観を同時に有しているので、彼の語りはごちないが、この小説の語りはシャーロット・ブロンテの後の小説の原型となっている。

キーワード：シャーロット・ブロンテ、『教授』、語り手、自己抑制、感受性

『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847) に代表されるように、シャーロット・ブロンテ(Charlotte Brontë) は女性の語り手による一人称小説の書き手として知られる。しかし彼女が最初に執筆した小説『教授』(*The Professor*, 1857) は男性の語り手を採用しており、当時の英国では女性作家による小説で一貫して男性の語り手が用いられているものが希少であった事実に鑑みれば、『教授』の語りは注目に値すると言えよう¹⁾。また、『教授』にはその後の彼女の作品に見られる特徴やテーマが早くも現れているが、中でも教育という問題はその後彼女の小説を特徴付ける重要な要素となっている。『教授』の語り手ウィリアム・クリムズワース(William Crimsworth) は小説中で教師となる。しかし彼は自己抑制を指針として行動する一方で感受性を重要視するので、彼の語り、ひいては彼の授ける教えには矛盾が認められる。本論文ではそのような矛盾をはらむ『教授』の語りについて考察してみたい。

1. 教訓的な語り

『教授』は、語り手クリムズワースがイートン校を卒業した後、工場主として成功した兄エド

ワード (Edward) を頼って北部の町へ出立した次第をつづった書簡形式から始まるが、この手紙の受取人チャールズ (Charles) からの返信はなく、第2章以降は書簡体の体裁自体がほとんど失われ、語り手クリムズワースが一人称で語る小説となる。彼は兄の会社を辞め、ブリュッセルへ渡り、フランソワ・ペレ (François Pelet) の経営する男子校と隣接するゾライド・ルテール (Zoraïde Reuter) の経営する女子校で教鞭をとるが、最終的には、女子校でレースの修繕を教えながらクリムズワースから英語を習っていたフランシス・アンリ (Frances Henri) と結ばれ、二人でイギリスへ渡って学校を経営する。このように小説の大部分は学校を舞台に展開されており、自分自身の学校開設計画が頓挫して間もなかったシャーロットにとって教育がいかに重要な関心事であったかよく表れていると言えるだろう。この作品が何度も出版を断られた事実や、当時の概して厳しい書評から伺えるように、『教授』の評価は他作品に比べて低かったものの、シャーロット自身は特に学校が舞台となっている部分をむしろ高く評価していたことが次の書簡からわかる。

A few days since I looked over "The Professor." I found the beginning very feeble, the whole narrative deficient in incident and in general attractiveness; yet the middle and latter portion of the work, all that relates to Brussels, the Belgian school &c. is as good as I can write; it contains more pith, more substance, more reality, in my judgment, than much of "Jane Eyre". It gives, I think, a new view of a grade, an occupation, and a class of characters — all very common-place, very insignificant in themselves, but not more so than the materials composing that portion of "Jane Eyre" which seems to please most generally —²⁾.

この手紙を書いている時点において既に高い評価を得ていた作品『ジェイン・エア』よりも、特に学校が舞台となっている後半部分に関しては、シャーロット自身は『教授』の方を高く評価している点、さらにここで『ジェイン・エア』の世評に言及しながら読者の反応にも留意している点は注目に値する。

シャーロットの読者に対する意識は、小説中の語りにも表れている。語り手が読者を意識し、読者に向かって直接呼びかける語りの形式は、他作品においてもしばしば見受けられるが、この小説の語り手は単に読者に出来事を伝える以上の機能を果たしており、読者より多くの情報をにぎっている優位者としての立場に自覚的である³⁾。たとえば、女学校の校長ゾライドとの恋愛遊戯の行く末をほのめかしながらも語らず、「後でわかるでしょう」(pp. 95-96)⁴⁾と述べるだけに留めて読者の気をもたせたり、フランシスを賞賛した後、次のように、読者に甘い蜜だけでなく苦汁も味わうように命じたりする。

Now, reader, during the last two pages I have been giving you honey fresh from flowers, but

you must not live entirely on food so luscious; taste then a little gall — just a drop, by way of change. (210)

このようにクリムズワースの語りは読者をじらし、読者の心理を操ろうとする意図が明確であるばかりでなく、彼の語りは時に教訓的な口調を帯びる。ベルギーに到着した彼は、読者にベルギーについての知識を授けるという自分の役割を意識し、教師が生徒に語りかけるように読者に向かって語りかける。

READER — perhaps you were never in Belgium? Haply you don't know the physiognomy of the country? You have not its lineaments defined upon your memory as I have them on mine?

...

This is Belgium, Reader — look! Don't call the picture a flat or a dull one ... (49)

語り手が読者に呼びかけるという語りの形式は他にも多く見られるが、クリムズワースの語りは他の教養小説 (Bildungsroman) と比べてもはるかに教訓的であり、読者に出来事を報告するというよりは読者を教え諭しているかのようである。

クリムズワースの語りがこのように教訓的であるのは、彼が教師という職業に就いていることも理由の一つと考えられるが、もう一つの理由として挙げられるのは、この小説が当時の女性作家としてはきわめてまれな男性の語り手による一人称小説であるということである。従来、多くの批評家はこの小説の語りを欠点とみなす傾向があったが、このような批評の流れにアネット・R・フェデリコ (Annette R. Federico) は一石を投じた。フェデリコはしばしば酷評されてきたこの小説の語りを再評価し、男性による語りがぎこちないのはクリムズワースが自分の感情を抑制しながら語るためであって、そのような自己抑制は父権制の内部で男性が自己形成する際に伴う代償であると論じた。

The Professor is a remarkable early effort to confront how Victorian ideologies of gender both form and limit personality, for in using a male voice, Brontë uncovers how the gender of her character largely makes him who he is⁵⁾.

フェデリコによれば、この小説の語りはヴィクトリア朝社会が男性に課していたジェンダー・イデオロギーに伴う自己抑制という代償を、男性の視点から描出するのに成功している、ということになる。

たしかに『教授』の語り手であり主人公であるクリムズワースは権力や性的支配の欲望に突

き動かされ、その強い感受性を抑制しており、ヴィクトリア朝において要求される資質「自己抑制」を体现する人物として描かれている。強い感受性を抑え「自己抑制」を達成するため、彼は自己と外界との間に境界を設け、自己の内部を外部にさらさないよう最大の注意を払っており、彼はまぎれもなく自助（self-help）の理念を達成するため自己抑制を身に付けた人物であると言えるだろう。しかしクリムズワースの語りを追っていくと、彼が自己抑制を体现した人物であると論じるだけでは十分でないように思われる。彼はむしろ自己抑制とは二律背反する、人の感受性や外界が人の内面に及ぼす影響力をも高く評価していることが観察されるのである。

2. 人間の内面と外界

人の内面に存在する心と外部の世界との関係が当時の心理学における論争の場となっていたことは、サリー・シャトルワース（Sally Shuttleworth）等が骨相学や観相学、動物磁気説などの疑似科学を例に挙げて詳細に論じている⁶⁾が、リック・ライランス（Rick Rylance）によると、19世紀前半の心理学の言説は大きく二つに分かれていたという⁷⁾。一方の機能心理学は、人間の心を、環境によって多少の影響は受けるけれども本来生まれつき備わっている人間の本性であると考えていたが、それに対し、他方の観念連合説の流れをくむ心理学では反対の立場を取り、人間の心は主に経験によってつくりだされるものであると捉えていた。『教授』の語り手クリムズワースは、自己抑制を達成するため、一見、前者の考え、すなわち人間の心は生来備わっていて外界の影響をほとんど受けないほどの確固とした存在であり、人の内面と外界の間には堅固な境界が存在するという説を支持しているようだが、その一方で、彼の語りの中には、人間の内面と外界との間の境界には浸透性があり、外界は人間の内面に影響を与えるということが示されている。

まず、人の内面と外界との境界が小説中でどのように表されているのか見ていくと、クリムズワースは兄の会社という新しい環境に入るとすぐに、自己の内部を防御し、堅固な「兜」という比喩を用いて防御の固さを強調していることがわかる⁸⁾。

I thought he was trying to read my character but I felt as secure against his scrutiny as if I had had on a casque with the visor down — or rather I shewed him my countenance with the confidence that one would shew an unlearned man a letter written in Greek — he might see lines, and trace characters, but he could make nothing of them — my nature was not his nature, and its signs were to him like the words of an unknown tongue... (emphasis added, 17)

「兜」のメタファーは後に女学校で最初の授業を行う時にも用いられる。クリムズワースが女学校で生徒たちを観察すると、女生徒たちの方も彼を見つめ返してきた時の彼の反応は次のように描かれている。

In less than five minutes they had thus revealed to me their characters and in less than five minutes I had buckled on a breast-plate of steely indifference and let down a visor of impassible austerity. (emphasis added, 77)

鋼の胸当てや兜のメタファーからわかるように、彼女たちの視線から自己の内部を防御するための境界は何物をも通さない堅牢さを誇るが、ここでクリムズワースは自己の内部を防御すると同時に相手の内部が露呈されていると述べて、女生徒たちと自分を対照させている。すなわち、彼は自己の内部を防御することと共に相手の内部を見通すことを重視しているのだが、骨相学の影響を指摘するまでもなく、彼にとって自己の内面を隠したまま相手の内面を読み取ることは、相手との力関係において上位に立つことを意味する。彼は小説の最初から、他人との関係において常に上位に立つことに異常なまでの関心を寄せている。読者に対する優越者としての教訓的な口調はもちろん、生徒たちに対しても優越性を得ることに心をくだき、ペレ氏の男子校での初授業に臨む際、生徒たちより優位に立つため、まだ慣れないフランス語を使うことを躊躇し、一度生徒たちに対して優位に立つことに成功すると、その関係を保つことに細心の注意を払う。

このように他人との関係における優劣に非常に敏感なクリムズワースにとって、自己の内部を防御することと相手の内部を見抜くことは、小説全体を通じて最大の関心事となっているが、相手の内面を読み解こうとする試みが最も顕著に現れているのは、女学校の校長ゾライードとの関係である。ゾライードとクリムズワースは熾烈な互いの内面の読み取り合いを繰り返す。

I watched her as keenly as she watched me; I perceived soon that she was feeling after my real character, she was searching for salient points and weak points and eccentric points; she was applying now this test, now that, hoping in the end to find some chink, some niche where she could put in her little firm foot and stand up on my neck — Mistress of my nature. (emphasis added, 80)

この時点でクリムズワース自身は自己の内面を読み取られる「裂け目」を晒していないと信じているようだが、彼が自己の内面を完全に覆い隠すのに失敗していることは徐々に明らかになっていく。たとえば、クリムズワースはゾライードとペレ氏が夜中に密会している現場を

「解説」(telling)ではなく「提示」(showing)の手法で語るが、その密会で彼らがクリムズワースをからかっている言葉から、彼の内面は彼等に暴露されていることがわかる。

[Zoraïde Reuter] “What do you say François? Do you say Crimsworth is in love with me?”

[François Pelet] “Over head and ears.”

[Zoraïde Reuter] “Has he told you so?”

[François Pelet] “No — but I see it in his face — he blushes whenever your name is mentioned.”

A little laugh of exulting coquetry announced Mdlle. Reuter’s gratification at this piece of intelligence (which was a lie, by the bye, I had never been so far gone as that, after all).

...

... so, for a time, was my faith in love and friendship; I went to bed — but something feverish and fiery had got into my veins which prevented me from sleeping much that night. (100-101)

熾烈な内面の読み取り合いを通じてクリムズワースは既にゾライードの欠点を認めているにもかかわらず、この密会を目撃する直前には彼女について想いをめぐらし、懸命に彼女の欠点を好意的に解釈しようとしているところから見ても、彼がゾライードに少なからぬ好意を抱いていることは明らかである。しかし彼は「嘘だ」と言って即座にそれを否定し、その後も二人の会話を聞き続けようと一見冷静に場景を描写し続けるので、「嘘だ」という彼の言葉には信憑性があるかのようだが、その直後、彼は上手く言語化できない自分の内面を身体感覚を用いて描写するので、彼の怒りや衝撃はその描写によって十分読者に伝えられる。

この出来事はクリムズワースが信頼できない語り手であることだけでなく、彼の内面が周囲の他者に露呈されていることをも示している。実際、この事件以前にも彼の内面は早くから周囲の人物たちに見破られていた。友人ハンズデン (Hunsden) はからかうように「クリムズワースは感受性が強すぎる」「there’s too much of the sen-si-tive” (21) と指摘し、ペレ氏は次のように「クリムズワースには感受性の底なしの泉がある」と述べる。

[François Pelet] “She was sounding your character.”

[Crimsworth] “I thought so, Monsieur.”

[François Pelet] “Did she find out your weak point?”

[Crimsworth] “What is my weak point?”

[François Pelet] “Why the sentimental. Any woman, sinking her shaft deep enough, will at last reach a fathomless spring of sensibility in thy breast, Crimsworth.”

I felt the blood stir about my heart and rise warm to my cheek.

[Crimsworth] "Some women might, Monsieur." (83-84)

ここで、感受性、すなわち自己の外部から内面に影響を受けることは、ペレ氏から弱点とされている。「心臓の辺りで血が騒ぎ、かっとした熱が頬に上る」という身体感覚の描写からクリムズワースの激しい感情を我々は察することができるが、その直後、彼自身は「そういう女性もいるかもしれませんがね、ムッシュー」と冷静に会話を終わらせている。このように、クリムズワースは他者から弱点と見られがちな感受性を隠し、自己抑制を指針として行動するため、他の登場人物に彼の内面が暴露されている場面が描かれているにもかかわらず、彼は自己抑制を体現した人物であると解釈されてきた。しかし、彼自身は常に感受性を否定的に捉えているわけではない。次に、人間の内面に外界からの影響が浸透することを彼はどのように捉えているのか考察することにする。

3. 外界からの影響を受け入れるものとしての「教育」

「人間とは影響されやすいものだ。いや、少なくとも当時の私はそうだったのである」"So impressionable a being is man — or at least such a man as I was — in those days." (72) と述べて、自ら感受性が強く影響されやすい人物であることを認めているクリムズワースにとっては、逆に、感受性が欠如していることこそが欠点と映る。彼は女学校でお得意の骨相学の知識を用い、オランダ人の女生徒には感情が欠けていると評したり (76)、ベルギーに到着して以来一度も感受性に富んだ容貌を目にしたことがないと結論づけたり (107)、また、ゾライードには全く情熱がなく、感受性は鈍いと早くから判断を下し (81)、次の引用にあるように、女学校のイギリス人女生徒は、人間性を高めてくれるような感情に対して愚鈍な無関心を身に付けてしまった (93) と述べる。

A few English pupils there were in this school and these might be divided into two classes. First the continental English — the daughters chiefly of broken adventurers whom debt or dishonour had driven from their own country; ... they [the daughters] had picked up some scanty instruction, many bad habits, losing every notion even of the first elements of religion and morals, and acquiring an imbecile indifference to every sentiment that can elevate humanity. (93)

クリムズワースは英国人としての誇りを小説中常に強調しているが、彼にとって英国人と外国人とを隔てるいわば指標とも言えるものは、感受性や外界からの影響を受け入れる能力であ

る。上の引用においては英国人の女生徒もまた感性が不足していると評されているが、注目に値するのは、ここで酷評されている英国人の女生徒はもともと感受性に欠けていたのではなく、親の移住によって余儀なく外国の貧相な教育しか受けられなかったという境遇のため感受性に欠けるようになったのだとして、クリムズワースがその原因を教育に帰している点である。それに対し、他の一般的なベルギー人女生徒たちの欠点の原因は教育にあるのか生来のものであるのか判然としないが、クリムズワースは、次のように、外界からの情報を受け付けない彼女たちの性質を指摘する。

owing to her education or her nature books are to her a nuisance and she opens them with aversion, yet her teacher must instil into her mind the contents of these books — that mind resists the admission of grave information, it recoils, it grows restive; ... (109)

上の引用には、外部からの影響を受け入れないベルギー人女生徒たちに対する批判のほかにも、クリムズワースの「教育」についての興味深い意見が披露されている。彼にとって、教育とは外部から人の内面へと知識や情報などを注入し、それらが人の内面に受け入れられ、内面と外界の相互作用によって人が形成されていくことにほかならない。従って、外界からの影響を受け入れず、感受性を持たない外国人の生徒たちは彼にとって英国人より劣った存在となるのである。

クリムズワースは外界が人の内面に与える影響に関して、環境が人の性質を形成するという説を支持する興味深い意見を度々表明している。彼によると、自分がフランスにひかれるのは彼が置かれた状況によるのだという。

Our likings are regulated by our circumstances; the artist prefers a hilly country because it is picturesque, the engineer a flat one because it is convenient; the man of pleasure likes what he calls “a fine woman”; she suits him; ... (110)

クリムズワースは自分がフランスを好む理由を説明するため、画家や技術者や快楽を好む男を引き合いに出して、「人の好みは状況に規制される」という考えを導き出し、状況という外界が人の内面に与える影響を指摘している。また、彼は小説の前半で兄エドワードの専制的な態度に憤っていたにもかかわらず、ゾライードが彼に思いを寄せていることがわかった時には、次の引用のように、屈従する相手が存在するから専制が生まれるのだ、と論理を転換させ、専制 (despotism) は彼の生来の性質ではなく、まさに「彼の置かれている状況こそが彼をして非情な石の柱にならしめた」と変化の原因を状況に帰す。

Servility creates despotism. This slavish homage, instead of softening my heart, only pampered whatever was stern and exacting in its mood. The very circumstance of her hovering round me like a fascinated bird, seemed to transform me into a rigid pillar of stone; her flatteries irritated my scorn, her blandishments confirmed my reserve. (118)

このような一般化の過程が最も顕著に現れているのは年老いた未婚女性についてクリムズワースが意見を述べる部分である。

Look at the rigid and formal race of old maids — the race whom all despise — they have fed themselves, from youth upwards, on maxims of resignation and endurance; many of them get ossified with the dry diet; Self-Control is so continually their thought, so perpetually their object that at last it absorbs the softer and more agreeable qualities of their nature, and they die mere models of austerity, fashioned out of a little parchment and much bone. Anatomists will tell you that there is a heart in the withered old maid's carcass — the same as in that of any cherished wife or proud mother in the land — can this be so? I really don't know — but feel inclined to doubt it. (emphasis added, 201)

あきらめや忍耐、自己抑制の結果、柔軟で感じの良いものだった未婚女性たちの本性は失われてしまうと述べて、クリムズワースは環境が内面に与える影響を指摘しているが、ここで言及されている徳目「自制」(Self-Control)は、一人前の男性として形成されるためにクリムズワース自身が体得すべく社会から要求される徳目でもある。しかしながら、ここで彼が述べているのは、自己抑制の結果、未婚女性たちは良い性質を失っていくということであって、その逆ではない。このことから、彼が必ずしも常に自己抑制を是とみなしているわけではないことがわかるだろう。以上から、彼は人間の内面が外界から影響を受けることを肯定的に評価し、自身強い感受性の持ち主であると認めるのにやぶさかでないといえる。

このように豊かな感受性の持ち主だという自負があるからこそ、クリムズワースはフランスの内面に影響を及ぼすことができると自信を持って語り、また彼の教を内面に受け入れる能力に長けているからこそ彼は彼女を高く評価するのだろう。クリムズワースはフランスが彼を教師として敬うことに喜びを感じていると断言する。

先に指摘した読者に対するクリムズワースの教訓的な語りかけに鑑みると、彼はフランスだけでなく、読者にも自分の物語を通じて感化されるよう促しているかのようである。彼は「自分の経験が他の人のためになるかもしれない」(60)から語っているのであり、そもそも語り始めの部分から、「この物語は胸躍らせるようなものではないが、自分と同じ教師という職業に就いた人達が、この物語の中にその人達自身の経験の反映を見て関心を持ってくれるだろ

う」(11)と述べているところからも、彼は読者を楽しませるためだけでなく、読者を教育するために語っているのだということがわかる。彼は当初の目的に添う形で語りを進めていくものの、彼の語りは外界から内面へ影響を受け入れる「教育」を重視しているため、以上指摘してきたように、自己抑制を標榜する彼の語りにはほころびが観察される。彼の語りがぎこちないのは、過度の自己抑制のためばかりでなく、彼が外界と内面との相互浸透を重視しているためとも言えるだろう。人の内面と外界との間の強固な境界をうちたてる自己抑制と、その境界を浸透してゆく強い感受性との間で揺れ動き、ぎこちない語りを提示してしまうクリムズワースの語りを、シャーロット・ブロンテは後に女性の語り手による一人称小説へと発展させ、女性の語り手によってシャーロットの本領は発揮されることになる。しかし、『教授』において、強い感情と自己抑制との間の葛藤というシャーロットの作品を貫く特徴の原型を、私たちはクリムズワースの教訓的な語りから読み取ることができるのである。

注

*本稿は、日本ブロンテ協会関西支部 2003 年度大会（2003 年 7 月 12 日、関西大学）で発表した原稿に加筆修正したものである。

- 1) 当時の英国において女性作家による一人称小説で一貫して男性の語り手が採用されているものとしては、他にジョージ・エリオット (George Eliot) の短編小説 *The Lifted Veil* がある。またジョルジュ・サンド (George Sand) の *Indiana* やウィラ・キャザー (Willa Cather) の *My Antonia* なども男性の語り手が用いられているが、物語の中心人物は女性主人公であることをアネット・R・フェデリコは指摘している。
- 2) Charlotte Brontë, "To W.S. Williams," 14 December 1847. Smith, *Letters*, p574.
- 3) 『ジェイン・エア』の語り手は何度も読者に向かって直接呼びかけており、その効果については Carol Bock が詳細に論じている。また『ヴィレット』(*Villette*, 1853) においては、語り手の読者に対する優位性が際立っている。
- 4) ページ数は特記しない限り Charlotte Brontë, *The Professor*. Ed. Margaret Smith and Herbert Rosengarten (New York: Oxford UP, 1998) による。
- 5) Annette R. Federico, pp. 67-68.
- 6) Sally Shuttleworth pp. 57-70.
- 7) Rick Rylance p. 40.
- 8) 「兜」のメタファーの意義については、William Cohen と Sally Shuttleworth がそれぞれ指摘している。

参考文献

- Allott, Miriam. ed. *The Brontës: the Critical Heritage*. London: Routledge, 1995.
- Bock, Carol. *Charlotte Brontë and the Storyteller's Audience*. Iowa: U of Iowa P, 1992.
- Brammer, M. M. "The Manuscript of *The Professor*." *McNees* 14-26.
- Cohen, William A. "Material Interiority in Charlotte Brontë's *The Professor*." *Nineteenth-Century Literature* 57. 4. (2003): 443-476.
- Federico, Annette R. "The Other Case: Gender and Narration in Charlotte Brontë's *The Professor*." *McNees* 55-70.

- Glen, Heather. *Charlotte Brontë: The Imagination in History*. Oxford: Oxford UP, 2002.
- McNees, Eleanor, ed. *The Brontë Sisters Critical Assessments Vol. 4. Evaluations of The Professor; Twentieth-Century Studies, 1947-93; Comparative Studies*. Mountfield: Helm Information, 1996.
- Plasa, Carl. "Charlotte Brontë's Foreign Bodies: Slavery and Sexuality in *The Professor*." *J. of Narrative Theory* 30. 1. (Winter 2000): 1-28.
- Rodolff, Rebecca. "From the Ending of *The Professor* to the Conception of *Jane Eyre*." McNees 38-54
- Rylance, Rick. *Victorian Psychology and British Culture, 1850-1880*. Oxford: Oxford UP, 2000.
- Shuttleworth, Sally. *Charlotte Brontë and Victorian Psychology*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Smith, Margaret, ed. *The Letters of Charlotte Brontë: with a Selection of Letters by Family and Friends. Vol. 1*. Oxford: Clarendon P, 2000.
- Taylor, Jenny Bourne. and Sally Shuttleworth eds. *Embodied Selves: an Anthology of Psychological Texts, 1830-1890*. Oxford: Clarendon P, 1998.
- Tromly, Annette. *The Cover of the Mask: the Autobiographers in Charlotte Brontë's Fiction*. Victoria: U of Victoria, 1982.
- Wise, Thomas James. and John Alexander Symington. eds. *The Brontës: Their Lives, Friendships and Correspondence*. Oxford: Basil Blackwell, 1933. Philadelphia: Porcupine P, 1980.

On the Narrative of Charlotte Brontë's *The Professor*.

— Between Self-control and Sensibility —

Tomomi MINAMOTO

Abstract

The Professor, the first complete novel written by Charlotte Brontë, is narrated by a male narrator-protagonist, which is a rare practice adopted by women writers in early nineteenth-century England. The narrator, William Crimsworth, narrates his story as if he lectures to his readers. He does so partly because he is a teacher and partly because he embodies the Victorian construction of masculinity by suppressing his emotions and thus giving his narrative authority.

However, Crimsworth puts great value on sensibility by which we receive impressions from the outer world. At the same time he protects his vulnerable inner self by using such metaphors as "casque" and "visor". In other words, he encourages infiltration from the outer world into the human mind, while blocking expressions from the inner self. These contradictory values prevent him from giving a successful narrative. Consequently his narrative is awkward but it develops into the more sophisticated narrative voices of the female narrators in Brontë's later fictions.

Keywords: Charlotte Brontë, *The Professor*, narrator, self-control, sensibility